

誰でも、もつとオシャレを楽しんでほしい

幼稚園に通う頃には人形の洋服をつくり、刺繍や編み物をするのが好きだったという鶴丸礼子さん。装う服の本当の意味を追求するその姿勢について、語ってもらいました。

寝る暇を惜しんで服をつくる

今日も、朝方まで服をつくっていて、あまり寝ていないけれど思い立ったら止められないのです。これは、学生時代から変わらない昔からの性分で、あれこれ考えるよりもまず行動してみても、行動しながら考えるという生活スタイルです。

短大を卒業した後も、頼る人がいる訳でもないのに服飾の道に進みたいと思えました。オートクチュール「ユベール・ド・ジバンシイ」のアトリエの扉を叩き、同時に、文化服飾学院に通いました。新しいことを吸収すると、じっとしていられませんでした。昼間はジバンシイで働き、学校から帰宅すると夜から明け方まで、毎日その日に着る服をつくりました。1年間で365着。同じ服を2回着ることのない生活を送っていると、体には疲労が蓄積され、体調を崩してしまいました。診断は、肝機能障害。「このまま死んじゃうのかしら」と思い、自分のペースでできる大切な仕事があると信じて、独立しました。



服飾デザイナー
鶴丸礼子さん

自分らしく装うことの大切さ

病氣も回復に向かい元気が出てくると、またいつもの性分が抑えられなくなりました。インテリアコーデイナーの学校に通い、服飾デザイナーと二足のわらじです。バリアフリーの概念を学ぶ機会に触れ、寝たきりの人や障がいのある人の家を訪問しました。その時に自分の体に合わない服を着ていて、痛みや圧迫感に耐えている様子を目にしました。みなさんにお聞きすると、服がっぽつぽつしてしまうことで障がいが悪化したり、着たり脱いだりする動作に時間がかかることがわかりました。これを解決できるのは私しかない！と決心し、改めて体の採寸方法を自分なりに勉強し直しました。

そんな時、難病を患っている女性から服のリフォームを頼まれました。その女性はとてもオシャレで、服をたくさん持っていました。しかし、病気がなって体が不自由になり、好きな服を着られないので、私にリフォームしてほしいということでした。お気に入りの数着をリフォームして、着られるようになるように、お化粧をされて、デイスービスに通うようになり、リハビリも頑張っておられました。



(上)セミナーの様子。(下)ファッションショーの様子

その時、自分らしく装うことが、生活の質を上げるきっかけになり、生きる喜びにもなると気づかされました。

違和感を与えない
鶴丸式製図法

肩こりや腰痛などの体の不調は服のデザインが関係していることもあります。このことは、障がいのある人の服をつくるようになって改めて実感しました。何度も採寸、仮縫い、調整を繰り返すうちに、採寸の重要なポイントがわかり、試行錯誤の末にたどり着いたのが鶴丸式製図法でした。体の前後左右の46カ所を採寸すれば、補正がいらぬ原型が誰でもかたんにできます。

どんな体型にもなじむ着心地の良さ

を追求しているうちに、約30年間で障がいのある人の服を千着以上つくりました。みなさんから「まるで着ていないみたいに体への負担がない」と、お聞きするのが励みになっています。

でも、これは障がいのある人に限ることではありません。人間は、50歳代になる頃から肩が下がり、体型が変化します。それなのに体に合っていない服を着続けることで体への負担が増し、体調を崩される人もいます。体に合った服を着ることの大切さをもつと伝えていきたいと思っています。

服が医療を
サポートする時代が来る

今、障がい者用の服をつくる国家資格制度を成立させ、障がいのある人の服をつくれた場合に健康保険などの適用ができるように働きかけています。その動きは、私のアトリエのある大分市障害福祉課で全国に先駆けて始まり、障がい者のための服づくりのセミナーを開講しています。その成果を、障がい者の衣服製造技能士の育成を行う訓練学校へと発展させ、国家資格として認められる人材の育成をめざしています。

セミナーの受講生の中には、ご自身が障がいを持ちながら、服づくりをしたいという思いを持っている人もいて、そのこ

とは障がい者の新たな雇用の確立にもつながるのではないかと考えています。

また、体に負担のかからない服を着ることで、病院に行くことが少なくなったり、薬を飲む必要がなくなったりすれば、超高齢社会を迎える日本の医療費の軽減にもつながります。

私は、みなさんがもつとオシャレして、着る喜びを実感していただくことが、より豊かな社会の実現を可能にすると考えています。

Tsurumaru Reiko

服飾デザイナー。一般社団法人「服は着る薬」代表理事。全国技能士会連合会マイスター。1956年鹿児島県生まれ。オートクチュール「ユベール・ド・ジバンシイ」のアトリエに勤務後、独立。鶴丸式製図法を開発し、「服は着る薬」を提唱している。種から栽培する藍染の染色展や、創作服の個展なども開催している。現在、障がい者のオーダー衣服への国の保険適用を目的として、関連するファッションショーを精力的に行っている。